

別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 園田 節子

地域文化研究 (Area Studies) にとって、個別地域を超えた広域地域の構造連関や地域間比較についての考察は、グローバル化が飛躍的に進展する現代、その必要性がつけね唱道されるわりに、実際の成果はいまだ乏しいと言わざるを得ないのが実情である。その理由としては、こうした研究にとって、複数の地域文化への専門的理解、多言語の運用能力、各地に散在する大量の資料調査・発掘などの、研究遂行上の困難が指摘できよう。そうした中で、園田節子氏は本論文「近代におけるヒトの国際移動の歴史研究——南北アメリカ華民と近代中国の関係構築」において、中国から南北アメリカへの大量の労働移民という歴史的現象を、まさしく一国史を超える広域的視座から、歴史実証的手法で再構成しようという意欲的な問題提起を行っている。

論文は、序章と本論八章、および終章からなり、巻末に参考文献目録を収める。図表・地図・参考文献を含めた総ページ数はA4版239ページ、字数は約34万字（原稿用紙400字詰めに換算して約850枚）の分量になる。

まず、簡単に本論文の内容を紹介しておく。

序章では、一九世紀中葉、清朝中国から南北アメリカ大陸に向かう継続的なヒトの移動に注目し、移民コミュニティの形成過程の具体的諸相を通じて、太平洋またぐ地域間の関係性の変容の中に、「近代」の時代性を見いだそうとする著者の問題意識が提示される。ここで著者が批判するのは、一国史にとらわれてきた既存の華僑・華人研究や同化主義的アプローチに傾いてきた移民研究の限界であり、それに代えて提示するのが、トランスナショナル・マイグレーションという新たな方法論的視座である。こうして、著者は既往の研究の問題点を整理するとともに、移民を周辺の問題としか見なしてこなかった戦後歴史学そのものへの疑問も提起する。そこで著者は、サンフランシスコ、ニューヨーク、ニューヘイヴン、バンクーバー、リマ、ハバナなどにおける精力的な現地資料調査の成果にもとづきながら、環太平洋圏の「華民」研究の意義と可能性

について、方法論的考察を試みる。

本論は全体として二部構成になっており、第一部「華僑の越境と国家」では、近代のヒトの大量かつ継続的な移動とそれにもなう国家（清朝中国）の関わりを通じて、地域を結ぶ移民の存在が国家間の関係を新たに作り出してゆく過程がたどられる。

まず第1章は、一九世紀半ば、中国からアメリカ合衆国・ペルー・キューバに向かう大量の契約労働者が現れる国際的背景と環太平洋圏におけるヒトの大量移動の経緯を述べる。ここで発生したいわゆるクーリー（苦力）貿易問題に、中国政府が関与しはじめるのが1870年代になってからであり、第2章では、本国から派遣された陳蘭彬と容閔によるアメリカ華工・ペルー華工の現地調査の様子が、未公開資料などを駆使して紹介され、本国官僚が在地華民コミュニティへの関与を強め、積極的華民保護政策を講じるに至る過程が考察される。第3章は、クーリー貿易の終わりを告げる1874年のマカオ禁止令をとりあげ、この間の国際的論議や係争事件を通じて、ラテンアメリカと中国（広東省）の間の地域間関係を強めたのが、まさしくクーリー貿易という近代の半強制的なヒトの移動であったことが確認される。

第II部は「南北アメリカの『官』と『商』」と題して、海外華民コミュニティの形成と変容のプロセスを、領事館や清朝外交官との関係において、個別に検討する。

第4章および第5章では、北米最大であったサンフランシスコの華民コミュニティが、同郷・同族的結合からそれらを統括する中華総会館へと結集する流れが実証的にたどられる。著者は、ここでコミュニティのリーダーであった「華商」に対する清国官僚（外交官や視察官）の役割を重視し、新たな社会秩序の構築が「近代化」しつつある本国国家との強い政治的・文化的結びつきにおいて可能となったことを指摘している。続く第五章では、カナダのビクトリアにおける中華会館設立が、サンフランシスコ総領事から直接手ほどきされながら進められたことを明らかにし、南北アメリカにおける華民コミュニティが、「官」と「商」の関係構築を軸に、「転港」華商を通じて広がっていた事実を指摘する。南米（ペルー）、中米（キューバ）の華民社会における「官」「商」関係を分析するのが、第7章および第8章であり、ここでもサンフランシスコの中華会館設立のパターンが、官僚やこれと結びつく華商のつながりを通じて、遠隔地の華民社会に移植される事例が検討される。最後の第9章では、第II部前五章の

分析をふまえながら、華民社会における「官」「商」関係構築のひとつの実例として、現地中国人子弟への教育（とくに中文教育）を清国官僚たちが率先して主導したこと、またそれが同時期の本国における近代国民教育と同調していたことを指摘する。

以上の考察をもとに、終章では本論の総括がなされ、一九世紀後半に生じた華民のトランスナショナル・マイグレーションの事例研究が歴史研究や地域研究にとってもつ可能性と意義が述べられ、今後の展望が示される。

以上のような構成と内容をそなえる本論文にたいして、審査委員は一致して、議論のスケールの大きさ、地域研究としての視野の広がり、資料調査の堅実さを指摘し、高い評価を与えた。本論文の大きな貢献としてとくに指摘されたのは、以下の諸点である。

第一に、大量の資料調査と先行研究の入念な検討をもとに、華僑・華人（本論ではこれらの語のもつ「国民史」的含意を避けて「華民」を用いているが）の多様で複合的な存在形態を具体的に明らかにしたことである。しかも、それぞれ個性的な発展を遂げた北米や中南米の華民社会が、「転港華商」などを通じて相互に結びつき、また清朝官人の関与や統括団体の設立においても、広範な関係性を構築していたとの指摘は独創的であり、トランスナショナル・マイグレーションというアプローチが実証研究において十分に活かされたものと評価できる。今後の移民研究の新展開にとって多くの示唆がそこには含まれていよう。

第二に、それと関係して、往々にして一国史的発想に閉じこめられがちであった華僑・華人研究を実証的歴史研究として、より広い環太平洋圏という「場」に開放した著者の力業は並大抵のものではない。論文の中では、主要な言語として漢文、英語、スペイン語の資料が縦横に駆使されるとともに、北米や中南米の各都市に蓄積された文献や情報を求めて、必ずしも資料の保存・公開状況のよくない土地にも足を運び、精力的な調査を進めた著者の労苦が、本論文ではまさに地域研究の名にふさわしい実りをもたらしていると言える。

第三は、華民コミュニティの秩序形成のあり方を、「官」「商」関係を軸に生き生きと記述し、それをモデル化するのに成功している点である。中国史における官民関係、官商関係、公私論などは、とくに近年になって現代中国における市民社会の形成や資本主義的発展の問題とも絡めて、多くの学者が歴史上の

各時期において関心を持ち、研究を進めている分野であるが、本論文はそれらと問題意識を共有しつつも、海外の移民社会という別の場で、同郷・同族団体がいかにして遠隔の近代国家と関係を生じるのか、また具体的個別的なコンテクストの中で、そうした関係がいかに変容してゆくのかについて、清末の「紳商」（官僚と結びついた特権的商人）論なども視野におさめながら、生彩にとんだ議論を展開している。こうした議論の展開のしかたは、おそらく北米・中南米の華民社会においてのみならず、東南アジアの華僑・華人社会の歴史を研究する上でも有効であるだろうし、より一般的に、移民社会とホスト国家の関係を考える上でも多くの示唆を与えるものだろう。審査委員が一致して、チャレンジングな論文と評した所以である。

もちろん、本論文に若干の欠点や不足がないわけではない。審査委員からは、英文や漢文の資料の読みの甘さ、清朝の官制に対する基本的理解の不足などが指摘された。また、中南米史の基本的事項に関する記載ミスも散見されるとの指摘があった。より大きな問題としては、たとえばサンフランシスコとリマ、ハバナとパナマというように、移民コミュニティを取りまくホスト社会の性格の違いが、「官」「商」関係のあり方に大きく影響しているはずなのに、そうした視点が本論文では欠けていること、また、団体の法人格取得という、移民コミュニティの存続にとって肝要な問題が、本論文ではまったく触れられていないことへの不満が漏らされた。さらに、華民社会における「官」「商」関係を考える際には、秘密結社や族的単位（公司）の役割が無視できない、との指摘も審査委員からなされた。

しかしながら、以上述べたような短所は、本論文の学術的な価値を損なうものではない。むしろ、本論文が書かれることによって、新たな問題が浮上し、別の視圏が切り開かれたという意味で、研究史上の寄与と見なすこともできるだろう。

以上、総括するに、本論文の達成が今後の環太平洋圏の移民史や東アジア近代史の研究に新たな視野と方法論的課題をもたらすことは疑いない。

したがって、本審査委員会は一一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい論文と認定する。